

みず が か
水の画家モネ

ARTIZON MUSEUM

①



《アルジャントゥイユの洪水》1872-73年 油彩・カンヴァス

②



《アルジャントゥイユ》1874年 油彩・カンヴァス

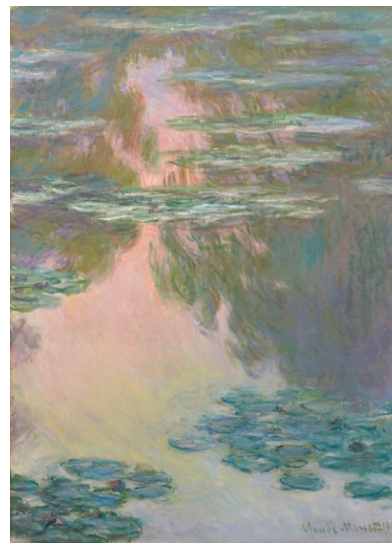
Q1. 4つの絵の共通点や違いを
さが探してみよう！

③



《睡蓮》1903年 油彩・カンヴァス

④



《睡蓮の池》1907年 油彩・カンヴァス

Q2. ④の絵の水面には何が映っているかな？
自由に考えてみよう。

Q3.下の 2 つの絵はそれぞれどんな水面を表しているんだろう。

Q4.この 2 つの水面をまねして、実際にかいてみよう。

展示室ではえんぴつを使ってね。おうちでは絵の具やクレヨンなど自由に使ってみよう。

5

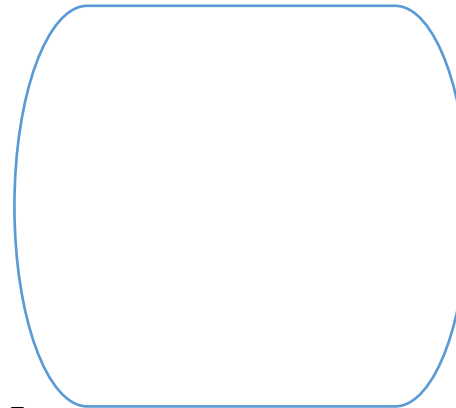


《雨のベリール》1866年 油彩・カンヴァス

6



《黄昏、ヴェネツィア》1908年頃 油彩・カンヴァス



生涯、水を描き続けた画家モネ

モネは 1840 年フランスのパリに生まれました。4～5 歳の時家族と共にセーヌ河口の港町、ル・アーヴルに移り住みます。19 歳の時本格的に絵を学ぼうとしたモネは、パリに行きます。モネは 1871 年から 1878 年まで、パリ近郊のアルジャントゥイユで暮らし、セーヌ川沿いの風景を繰り返し描きました。①と②はこの時期に描かれたものです。①は 1872 年の冬、モネが 32 歳の時に制作されました。この冬、セーヌ川は雪解け水で増水し、洪水に見舞われました。奥には塔のある家とともに工場の煙突も見えて、この地域において工業化が進みつつあることが分かります。

1870 年代後半になるとモネは、より自然が残るヴェトウイユというセーヌ川の河畔にある町へと移り住み、1881 年までその地で過ごしました。

1883 から 1889 年までモネは頻りに旅を繰り返していました。⑤は 1886 年、モネが 46 歳の時にブルターニュ半島の南にあるベリールという島を訪れたときに描いたものです。この島を題材にモネは油彩画を 40 点ほど描いています。モネにとって荒海というのはそれまで描いたことのないモチーフで、新たな挑戦となりました。海の白い波は曲線で表されており、荒々しい水面の表現が印象的です。また、横なぐりの雨が斜めのタッチで表現されており、遠くの岩は雨でかすんでいます。⑥は 1908 年 9 月、モネが 67 歳の時イタリアのヴェネツィアを訪れた際に描かれました。この作品の左側に描かれているのは、サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会であり、逆光の中シルエットで表されています。空はうねるような筆致で、さざ波立つ水面は横向きのタッチで表現しています。

水の画家と呼ばれたモネは穏やかな水面、きざ波立つ水面、荒波立つ水面などを描き分けました。またモネの作品には海や川のほかに霧、霜、雨、雲など水にまつわる様々なものが登場してくるのが特徴の 1 つです。またその水分の質感によって描き方を工夫しています。

1889 年になると、生活も気持ちも落ち着き始めたモネは、1890 年、7 年間借りていたジヴェルニーの土地と家を買取ります。やがて近くのセーヌ川の支流から水を引いて池を造ります。池を造園して以降はほとんどの作品に睡蓮の池が登場します。③の作品はモネが 63 歳の時に描かれました。③では睡蓮と共に柳が描かれていますが、1907 年、モネが 67 歳の時に描いた④では柳は姿を消し、画面いっぱいに水面だけが描かれています。モネの視線が水面とそこに映る世界だけに注がれていったのが分かります。また筆のタッチもより大胆になり、簡略化された表現がなされています。こうしてモネは晩年の 40 年以上をジヴェルニーで過ごしました。

モネは旅に出ることはあっても、生涯を通じてセーヌ川流域を離れることはありませんでした。彼の眼そして心は生涯水から離れることはなかったのです。

ご自宅から大きな画像を見たい方は、作品検索より「モネ」で検索！

